

坂の上の日星雲

西郷 西盛

第一章 黎明編

第四話 空間騎兵

三浦半島の最南端に位置する城ヶ島。ここは古くから、うみうが生息する自然と歴史の宝庫で身近なリゾート地として愛されていた。青い海や入り組んだ湾など自然のままに残る景色の景勝地として知られていた。守さんはころには目の前に広がる大海原には巨大な海上都市郡が群生し、その夜景は絶景であった。

海底都市郡は海底新幹線で結ばれ、本土とは三浦半島で結ばれていた。この新幹線車両は高速交通機関集中試験所の島井始博士のチームが開発した浮遊型リニカモーターカーでその最高速度は105km/hに達していた。列車の形式を○○○系といい、一〇世紀後半に開通した日本の新幹線○系からもじつたものである。そういうえば、二つの列車は先端部が丸鼻のようなデザインで似ていなくもない。

守さんもこの列車で伊豆・小笠原海溝の発掘現場へかよっていた。発掘自体はもちろん宇宙考古学研究所がおこなうのだが、なにぶん発掘現

場は深海のため海洋科学研究所の協力をあおがなければならなかつた。

当時の海洋科学研究所は海上都市ミニュにあつた。あつたというよりミニュそのものが研究所であつた。所長（市長）は元波博士といい、今回海底探査に派遣されたのは剣田チームであつた。剣田教授はもともとは海洋生物学の専門家だつたが、当時、「零号」試作深海探査型潜水艦の開発を指揮していた。空いている深海探査船がなかつたため、試験がおわり解体をまつていた零号を使って遺跡発掘を行うことになつた。そのためには艦長として剣田教授、そのほかに島井副長、古井機関長らが派遣されてきた。ちなみに、島井副長は先にのべた○○○系リニア新幹線を設計した島井博士の二子息である。オートマチック化が進んでいた潜水艦は発

掘スタッフを合わせても十数名程度しか乗組員は必要なかつた。この発掘航海を島井副長の回想録「地底潜水艦」に乗組員の名前が数名でているのでここに記しておく。

発掘責任者・三本足進

副責任者・山井重志
やまいしげし

一般スタッフ・道野広、浦島次郎、畠恵次郎、高井研、島礼子
ゼロ

アルバイトスタッフ・宇都宮公久、梶深雪、足立太、古代守
きみひさ

「わしが、君のおじさんにし、まれたことを全て仕込んでやろう」

と、三本足がいった。やつてみるとこの仕事は、知的好奇心がみたさ

れるたのしい労働であった。発掘された遺物を分類したり、時には小型探査艇に乗って海底探査に連れて行つてもらつたりした。特に小型探査

艇の時には操縦やマニュピレーターにも触らせてもらい。ついには発掘チーム一の名人になつた。守さんは父の機動重機マグナムD型の開発中に試験運転などを手伝つたりして、こういうメカの操作は得意であった。

「守さんは、やるのう」

と、三本足は毎日ほめた。この博士は無類のほめ上手で、スタッフを毎日ほめてうまく使っていて評判が良かつた。特に守さんについては、「守さんはすごい、最初は世辞半分でほめていたが、どんどん吸収してお世辞でほめるところがなくなつてしまつたわ」と、三本足も舌をまいてしまつた。

潜水艦での発掘は数度にわけて行われた。

特に守さんが高校三年の時の夏休みの発掘は最後の締めくくりとして、一ヶ月間もぐりつけなしの航海であった。

この航海は、大発見をともなう大冒険の旅であった。そのころにはス

タッフたちもお互いの気心も知れ、家族のような関係となり、とても楽しい旅でもあつた。

山井重志という人は、古修司宇宙考古学研究所長の直接の弟子である。
ふるしうじ

その出会いは重志が貧乏学生だったころ、トンネル工事のアルバイトをしていたときのことである。

重志はもともと「本の虫」とあだ名されるほどの読書家で、工事中もひまを見つけては読書して工事スタッフのひんしゆくをかうべらいであつた。その工事中に太古の人類の化石を発見した。重志の知識がなければただの石ころと見逃されていたものを世に出したのだ。そのとき調査に古修司が来たのが宇宙考古学に関わるきっかけだつた。重志は知識のかたまりで、守さんたちアルバイトの学生にいろいろ教えてくれた。

宇都宮公久は長身の好漢でいつも微笑んでいるような顔をしていた。練馬大学の学生で専門は宇宙考古学でバイトスタッフたちのよき兄貴分として種々の相談にものつていた。守さんも後に進路相談などにのつてもらうこととなる。

梶深雪は公久の研究室の後輩で瞳の大きな亞麻色の長い髪の女性だつた、守さんはじめ、独身スタッフはひそかな恋心を抱いていたが、公久の彼女と発覚しみんなを落胆させた。のちに一人は無事結婚する」となる。

足立太は、練馬大学大学院工学部の院生で、専門は宇宙船のエンジンだ。宇宙考古学よりも零号そのものに興味がつよく、古井機関長の助手のようになつっていた。

遺跡発掘の成果としては、日本海溝のゼスの遺跡と大きく変わらず、ゼスたち分布範囲がひろがつただけであった。ところが三年間の発掘の最後にきて大きな異変がおそつた。

「・・ゴーストサブマリン探知」

ソナー係の島礼子の声からそれは始まった。

「民間人が乗っている時になんてこつたい」

島井副長の上ずつた声がする。乗組員が艦橋に集められた。操縦士の浦島次郎と島礼子は、たがいに声を掛け合いながら零号を操っている。

剣田教授からゴーストサブマリンの説明があった。要約すると

—— 十年ほど前から国籍不明の潜水艦が世界の海にあらわれるようになつた謎の潜水艇のこと、偵察衛星にも探知できず、海底から突然現れ、各国の輸送船を無差別に撃沈し、いざともなく海底に消えてゆく。本当はどこかの陣営の新兵器ではないかという疑心暗鬼のなかであらゆる国がゴーストサブマリンの探索に乗り出したが、高性能深海型潜水艦の前にはゴーストサブマリンはなかなか現れない。何とかゴーストサブマリンの正体をつかまないとやつきになつていてる時に

零号の一〇〇〇m前に現れたというわけだ。

「ゴーストサブマリンの正体の心当たりはないのですか」

三本足がたずねた。

——断定はできないが、太平洋合衆国のネオ・ムー帝国特別州があやしいと各区政府は考えている

ネオ・ムー帝国（特別州）とは、世界に先がけて、一一一一年に南太平洋にドイツ系ヨーロッパ連合人のイダク博士によつて建設された史上初の海上都市がその母体である。その後都市はどんどん増殖し、世界に対し独立を宣言したのが一一一六年。もちろん各國はその独立は承認しなかつたが、ネオ・ムー帝国は太平洋における中継貿易でどんどん発展していった。

3 各国は苦々しく思つていても、武力によつてネオ・ムー帝国を破壊することもしなかつた。第三次世界大戦終結から四半世紀しかたつていないうに、当時どこの国も戦争アレルギーになつていていた。平和主義といつやつだ。後知恵になるがこのときに各國が協調してネオ・ムー帝国を武力攻撃しておけば、後にその何倍もの労力をかけることはなかつたのだ。まさに、第一次世界大戦後のパリ不戦条約による平和主義がヒトラーのナチスドイツの横暴を見てみぬふりをしたために第二次世界大戦をまねいてしまつたのと同じ構図である。

その後、オセニア合州国との合併交渉を行つて、アメリカ合衆国がその間にあるネオ・ムー帝国を説得して高度な自治（というより独立にちかい）を条件にネオ・ムー帝国特別自治州としてとりこんでしまつ

た。とり、こんだといえど聞こえがよいが、ネオ・ムー帝国側から見れば、

独立は保たれ、税金という名のお金で太平洋合州国軍という用心棒をやとつたようなものである。各國はネオ・ムー帝国に手を出せなくなり、ネオ・ムー帝国その財力を背景に議会にロビー活動を続け、逆に太平洋

合衆国の政治をあやつり勢力をのばした。大西洋にはアトランティス海上州支部、インド洋にもレムリア海上州支部と世界の海に勢力をひろげていった。

ネオ・ムー帝国についての話は続く。

ネオ・ムー帝国の初代總統はイダク博士の妻のバレタラである。プロンドのロングヘアの美人だ。もちろん夫であるイダク博士の傀儡で実権はイダク博士が握っていた。建国当初のネオ・ムー帝国は世界中に敵ばかりだったために、いかつい（実際イダク博士は画像を見るとなかなか強面だ）男性指導者より、女性指導者の方が外交交渉をうまく行えた。

―― 平和を愛する理想の通商国家――

というキヤソチコピーで建国したネオ・ムー帝国には実際イダク博士よりバレタラの方がふさわしかつた。彼女はすぐに世界中のアイドルとなり、移民希望者が殺到した。ただし、その移民の条件はある意味大変

―― 美しく有能な者――

つまり美男美女が移民の絶対条件なのである。もちろん、科学者などの特殊な才能を持つ者の容姿は若干考慮されたが、「内面の優秀さは必ず外側にも現れる」

という建前があるため、ある一線以上の美男美女にかぎられた。世界中から人材を高額報酬をエサに集め発展していくたネオ・ムー帝国だがこれは大きな足かせとなつた。例えば、自殺した神代計画責任者かみよだつた佐渡魚造などは、当時世界最高の宇宙船技術者だと誰もが認めていたが、そのさえない容姿ためネオ・ムー帝国からいに声がかからなかつた。もし、ネオ・ムー帝国が佐渡魚造を得ていたなら、ドップラーが失敗を繰り返した宇宙移民計画は二十年は早まつたといわれている。

ただし―― 美男美女のみの理想国家という触れこみは世界中の醜男醜女の猛烈な抗議をうけたのだが、ナルシストたちには受け入れられ、移民希望者はあとをたたず、まことに結構な絵本のような美男美女ばかりの国ができるがつた。

経済発展を続けるネオ・ムー帝国は太平洋合州国だけではなく、金にものをいわせ世界中の国に傀儡政党を作り政治力をましていった。古代進の実の父親であるミル・エス・ノスキーが闘っている、スラブ民主共和国連邦を支配しているバシウ党もネオ・ムー帝国の傀儡政党だつたとも

つぱらのうわさであった。

軍事力はというと、表向きは非武装だったが、強大な潜水艦隊を有し、海底ににらみをきかせているのではないかとの疑惑はあとをたたなかつた。こんな、ネオ・ムー帝国だからゴーストサブマリンの所有国だとうたがわれてもしかたがないところもあつたが、証拠はなかつた。

「追尾できるか」と剣田教授がきくと

「平気です。わが零号のほうがやや高性能だと思われます」

零号も垂直に追跡していく。足立太が

「潜水艦で垂直降下とはおかしな氣分だ」

と呟いたら、はげ頭で肥満おじさんの畠が
「昔の潜水艦では考えられないことです」と答える。

「じ、」までもぐるんかね？」

「たぶん伊豆小笠原海溝の底まで……」

「底がなかつたら？」

「底のない海なんてないわよ！」

梶深雪が会話に割ってはいて来た。そのとき島井副長が叫ぶよう

につぶやいた

「おかしい、まわりからは海底反応があるのに、降下してゆく真下には

反応がない

「島井副長や浦島、島両名は潜水艦の専門家である。追跡は十分可能だ。
また零号はもしものときに備え武装もしてある」
「ほな大丈夫や、ここは世界のためにひと肌ぬ」こうや」
高井のやや間の抜けた言葉でみんなの腹は決まった。

零号の方がわずかに優速だったのだが追跡は困難を極めた
「前方八百m、すごいやつです。ほとんど垂直にもぐっていきます」

島井副長の声が響く。ゴーストサブマリンは急降下爆撃機のように伊豆小笠原海溝に穂垂直に潜航していく。

深度は二万mを越えている。

「……」には底がない。BINの口を通つて中へ入つてゆくような気分だ」

島井が報告したとき、礼子が叫んだ

「変です、水圧が下がっています。深度計が海面下百mをさしていません」

「ゴーストサブマリンが水平に艦をたてなおして浮上しています」

「よしわれわれも浮上しよう」

「攻撃をされませんか」

「攻撃する気ならどうくにしているぞ」

なんとも不思議な光景であった。

二万m海底に地底海が広がっていた、その海面はプランクトンのせい
か真っ赤に染まっていた。天井は岩石でたたみあげられ、横には天井に
とどく柱、零号が入つてきたBINの口がそそりたつていた。

「ゴーストサブマリンから通信が入つています」

肥満でメガネの道野広の声が響いた。ゴーストサブマリンの通信をま
とめてみるとおおむね以下のとおりである。

——ゴーストサブマリンは、ネオ・ムー帝国が十年まえに発見した

地底海の探査用潜水艦である。地底海は大陸の地下も含め、世界中に張
り巡らされている。この地底海を利用すれば、世界中どこかの海にも神出

鬼没に現れる」ことができ、ネオ・ムー帝国が世界の海を支配する」ことができ
るので。本艦（ネオ・ムー帝国地底海探査船六号）は、乗組員の妻
レダが病氣のため醜くなり死刑にされ、それに同情するとともに、抗議
のため大東亜諸国連合への亡命を希望する
というものだ。剣田教授はだまつて考えていた。

ゴーストサブマリンの正体はわかつた。しかし、あまりにも高度な政
治的判断が要求される内容であった。数分の沈黙の後
「亡命を受け入れます」

と、剣田教授が決断したのと

「魚雷接近！」

という礼子の声が鳴り響いたのとほとんど同時であった。

「急速潜行、おとり用魚雷発射」

島井副長の反応は一步早かった。ゴーストサブマリン（探査船六号）
は反応が一瞬遅れたため撃沈されたようだ。

「潜水艦戦はまずい、こちらの方が優速だ。おとり魚雷を撃ちながら逃
げよう」

剣田教授は瞬時に判断する。島井副長が反論した。

「敵潜水艦はBINの口、地底海の出口に鎮座しています。逃げ道があり
ません。

「ゴースト潜水艦は地底海は世界中の海に広がっていると言っていた。

北を目指して逃げるのだ」

零号は北を目指して逃げた。ビンの口に逃げ込むとたかをくくっていた

敵潜水艦は、零号が北上を始めたのであわてて魚雷を撃ちながら追跡を

開始した。しかし、時すでに遅く。優速の零号はからくも敵潜水艦を振

り切ることに成功した。それから二十数時間

「上方にビンの口、出口らしき反応があります」

零号は浮上を開始した。浮上した場所は、日本近海、日本海溝の、まさ

にゼスの遺跡のすぐそばだった。

「ゼスもこの地底海を伝つて移動していたのかもしれないな」

三本足進がつぶやいたのを守さんは長く覚えていた。

7

「同時に・・?」

「なんか、人間同士の争いがいやになりました」

「戦いが怖いとか」

「それもありますが、それより、人間同士の争いで貴重な地底海が汚さ
れるのを見たくないというか。それに、地底海 자체の発掘では日本海溝
や伊豆小笠原海溝の遺跡と大きく変わらないのではとも思いました」

「ではどこを調査したいのかな?」

「宇宙です。ゼスの子孫を探索したいです」

「宇宙といつても、現在の科学力では太陽系の探査が限界だ。太陽系内

部でも進歩は可能であったが、守さんはきめかねていた。同じ名前の叔父の後をついで宇宙考古学部も考えた。また、工学部それもロボット工

学を専攻して父親を助けたいという思いもあった。不思議と母親の医学部には関心がわからなかった。悩みに悩んだ末、宇都宮公久に相談した。「工学にはそんなに興味があるのかい?」

「父の影響か、小さいときから機械いじりは好きでした」

「宇宙考古学とどちらが好きなのだい?」

「宇宙考古学は叔父の影響で昔から興味がありました。高校時代に発掘スタッフになつて、正直、これもいいかな、と考えました。ただ・・・」

「ただ・・?」

「今回の地底海の発見で、地底海を探査したいという気持ちと同時に・・」

いのではないかな」

「恒星間宇宙船がないとダメか……」

「なんだ、もう進路は決めているじゃないか」

「え？」

「一番したいことは恒星間宇宙の調査だ」

「そうですけれど、それは恒星間宇宙船がないから不可能です」

「なればどうすれば良いのだ??」

「なれば……あ」

守さんは立ち上がりつて叫んだ

「なければ造ればいいんだ。自分でつくれば！」

守さんは、目の前の霧が真っ青に晴れ渡るような気分になつた。

十七になつた守さんは、練馬工業大学工学部宇宙船工学科に進学した。

にとつて幸運だったかどうかはわからないが、地球にとつては大きな幸運だったと後にわかることとなる。

古代守は、特に大山歳郎と真田士郎と気が合つた。後に零式宇宙戦闘機コスモゼロを開発する鳥野の回想録では、三人で飲んでいるところをよく見たとい

う。特に、普段は無表情さから「サイボーグ真田」と陰口を言われていた真田士郎が、この一人にと話しているときだけに笑顔を見せていたのは印象的であつたという。

8 真田士郎は、大東亜諸国連合内では、プロメテ計画の大江戸博士と並ぶ宇宙船工学の権威、真田佐助博士のお孫さんで、いとこにはテレサのメツセージを受けた大東亜諸国連合科学技術省技官の伊賀盛三ヨシミツがいる。

兄弟は姉が一人いたが、月のテーマパークで事故にあい亡くなっている。そのときの経験が彼を無表情に変えたようである。

大山歳郎も家庭には恵まれていなかつた。兄弟は多く、妹三人と第一人の五人兄弟だが、父親をはやくに無くし、病氣がちの母親は幼い子供を一人で五人は育てられない、子供たちを親類に預けた。男女に分かれ預けられ、妹三人は母の実家の胎富家に預けられ、歳郎は弟の大とぼしのよう，在籍していた。例えば

大山歳郎、真田士郎、平賀一臣、新井伴太、島統悟とうご、鳥野始、機場賢悟はたばけんご、朝永某なにがし……。主なものだけでもこの数である。このことは、守さん

の心身は回復せずちょうど五十歳で他界した。それでも、歳郎は明るく、好奇心旺盛で、何にでも興味を持ち、面白そうないことにはなんにでも首を突っ込まずにはいられない性格にそだつていた。

同じ不幸な過去を持つても明るく振舞うと歳郎や、天性の朗らかさというか人間的魅力を備えた守さんらと接するうちに真田士郎も人間的な感じが出てきたのかもしれない。

三人の夢がなんとなく一致したのも仲が良かつた理由だろうか。三人とも恒星間飛行宇宙船を開発する事を夢見ていた。

守さんも他の学生も最新のエンジンの学習をした。しかし、それぞれ得意分野があつた。例えば島統悟などは、細かいメカ作りが得意であった。ちなみに島統悟は、零号の乗組員の島礼子の弟である。

こうして大学生活が一年たち二年たつうちに守さんの態度が変わってきた、ひとり考へこむことが多くなつた。士郎などが心配して声をかけても

「なんでもない」

というだけであつた。

—— 宇宙における人間の生と死 ——

という書物がある。

今となつては古典的な宇宙論だが、その高度に文学的な文章は当時の若者たちを宇宙にかりたてた。事実、大山歳郎や真田士郎を初め、守さんの同窓生の多くが愛読した。

作者は、沖田十三という物理学者である。この人は宇宙物理学の研究だけではあきたらず、自ら宇宙飛行士に志願して、大東亜諸国連合いや地球を代表する宇宙飛行士のひとりになつていて。その豊富な知識と経験を基にした宇宙論には、現在読んでみても息をのむ銘文である。沖田十三は銀河一〇〇年戦争では、宇宙戦艦大和^{ヤマト}の初代艦長に就任し、その後第七艦隊を率いてイスカンダルへの初の星雲間航行を成功させることとなるが、ここでは詳しくふれない。

守さんも「宇宙における人間の生と死」は愛読していた。他の仲間達と違つのは、沖田十三を昔から知つていたことだ。父方の親戚にあたり、父親の武夫とは従兄弟同士の間柄である。

—— 沖田のオジサン。

と、子供たちは呼び、むかしからよく家にあそびにきていた。特に

守さんをかわいがつてくれた。

大学に入學して二年が過ぎた頃、三浦半島に里帰りして大通りを上の空であるいていた守さんを、「沖田のオジサン」が呼びとめた。

「ひさしごりだな」

と、この著名な物理学者は声をかけた。

天王星探査を終えて久しぶりに地球に帰ってきたところである。

「うかぬ顔をしているな、どうした」

というやいなや。

「立ち話はいかん」

と、オジサンはあたりを物色した。真剣な話は立ち話ではできない。

という生真面目さである。物色すると喫茶店の野外テラスがあつたので腰をおろしコーヒーを二つたのんだ。

「どうしたというのだ」

と、オジサンがいった。守さんが「なんのことです」というと

「小さいころからお前を知っているがそんな顔は見たことがない。どう

せ親にもいえん悩みだろ。将来の進路かなにかであろう」

と、ズバリ本質をついてきた。守さんは子供のころからの親しみと、久しぶりの懐かしさから胸の内を喋りはじめた。沖田十三の人格的安心感に浸つてしまつたせいかも知れない。

守さんのなやみはこうだ。

自分は恒星間探査を志している。そのための宇宙船開発のために練馬

大学に進学した。ところが入学してみると、大山歳郎や真田士郎のよう

な天才としか言いようの人物がこの世に存在することを知った。これでは自分の出る幕はない。自分はむしろ開発された宇宙船に乗る。宇宙飛行士を目指したほうが良いのではないかと、針路変更を考えているというのだ。

宇宙飛行士

という職業は一十一世紀後半の当時でも選ばれた人間の職業であった。いやむしろ一十一世紀初頭の各国が宇宙開発に力を入れ始めた頃の方が宇宙飛行士不足で簡易になれたであろう。宇宙飛行士が飽和状態になるにつれ、一つの分野で実績を残すなりした者が希望して数十倍の難関を勝ち抜いてやつとなれるものであつた。守さんのような一介の学生にはまだまだ高額の花的な職業と世間では言われていた。

「守は知らんのかな」

と、オジサンはいった。守さんはコーヒーをすすりながら

「なにをですか」

ときくと

「宇宙戦士訓練学校というものができるのだ、これは宇宙軍の兵隊を育てる学校で卒業後何年かは宇宙軍にのこらねばならんがな」と容易ならぬことをいった。

「宇宙軍？」

「詳しく述べは軍事機密になるので言えんが、例のテレサのメッセージ対策で宇宙軍をつくることになったのだ。」

「宇宙人との戦争ですか。」

と守さんが問い合わせると、

「表書きはな、ここからは他言無用だが、火星などの植民星の独立対策も関係しているのだ。今年からは宇宙艦隊建設も始まるそうだ」

「軍人・・・ですか。」

守さんが躊躇していると

「軍人はいやか。そこがつけめだ。軍人といふことでなかなか生徒が集まりにくいそうだが、いっぽしの宇宙飛行士の訓練はうけさせてくれる。なに、宇宙戦争などそおこるものではない。何なら資料をとりよせてみたらどうだ」

沖田のオジサンはたちあがつた。

守さんは

「考えたこともないな。」

と、つぶやいた。できれば技術者か学者になりたいと思つて勉強して

きた。それがいきなり鼻先で軍人になるかと問われて即答できるわけがない。

ネットで調べてみたが、たしかに宇宙飛行士にはなれそうである。それでどうか今現在の守さんにとって宇宙飛行士への最短コースのように思えた。

「宇宙戦士訓練学校を受けるだと。」

と真田をはじめ大学の仲間が驚きながらいった。

「よせ、筋の通つた人間のゆくど、うじやない。」

「はあ」

守さんは、わざとにぶい顔をしていると、さわぎをききつけた。アナ無政府主義者の上級生キリストがきて

11 「軍人など自由がなく、国家に利用されるだけのつまらん仕事だぞ。」

「しかし、宇宙飛行士になれます。」

「宇宙飛行士になるためなら、わが身を売りさばくという事か。」

守さんはしばらくだまつたあと

「貴方さんは、お覺悟があつて右の(+)とき暴言をはかれたのかな。」

と、しづかにいった。

「ひとつをゆえなくののしりなさる以上、命をおかけになつておられるの

でしようね。ちょっと表にでましようか。」

相手は、真っ蒼になつた。

このはなしには、あとがある。

上級生は本庄恒雄という大学院の学生だったが、根は臆病な男らしい。

やにわに右肩をあげた。

「それが、先輩にいう言葉か」

と凄んでみせたが、病犬のように激しく息をしている。守さんはうつむいたまま黙殺した。相手が飛びかかってくれば、死んだ気になつてたたかつてやるつもりだった。

が、本庄はいなくなつていた。

守さんは手持無沙汰になつた。やがて知つた顔があやまりにきた。足立太である。本庄は震え上がって反省しているとのことで、自分の顔に免じて許してやつて欲しいとのことだ。守さんがうなづくと本庄が詫びをいれにきてこの話は終わつた。

テレサのメッセージから六年、各国では少しづつ宇宙軍ができるつあつたが、宇宙飛行士が絶対的に不足していた。大東亜諸国連合にも宇宙戦士訓練学校というものが出来たのが一七八五年である。

古代守がもしこの学校に合格するとなれば第一期生ということになる。場所は、南部海上都市の宇宙開発地区の中だよ。大きなスペース・スタワー

ーが目印だ

と教えられてきた。

みちみち、

—— 宇宙戦士訓練学校はどこです。

ときいても、たいていはさあね、と首をふるばかりで知らなかつたが、スペース・スターといえばすぐ答えてくれた。南部海上都市は、南部重工業の宇宙開発都市で、官民一体の宇宙開発拠点であつた。

全高一七七八mのスペース・スターを見上げながら階段を登つてゆくと、にわかに三十階建ての高層ビルがある。

12 衛門があり、そこで来意をつげると、兵隊が案内してくれた。校庭はひろく、ビルの中は各種機械や操作パネルが見え、巨大な宇宙船のようであつた。

事務室に入らされた。

軍曹が出てきて、

「履歴書はあるか」

と、きかれたので、提出すると、軍曹はそれをしばらく眺めたあと願書の書き式を教えた。

奥のほうに士官がいた。面長で目がするどくあごの張つた男で、近づいてきて、

「おまえは陸海空どこの軍かな」

といった。大尉である。

(これが、宇宙軍の士官服か)

と、守はうまれてはじめて士官というものの実物を見た。あとで知つたことだが、じんぐうじたけし神宮寺武士といい、空軍あがりの士官で、生徒司令副官といいう役目をつとめていた。

「軍人以外で受験するとは貴重なやつだ。試験は、簡単な学科試験と体力テストと小論文と面接じや。練馬大学出身なら学科は問題なかろう。体格もええから、体力テストもなんとかなるだろ。後は小論文と面接だが、軍人になるからには、少しくらい軍隊のことも勉強しておけ」と、大尉はいった。

守はおどろいた。軍隊というものについて、今まで一度も習つたり考えたことはない。学科や体力には多少の自信があつた。それを話すと、「軍人以外にも少しは別枠があるだろうからな」

と、この大尉はひどくおおざっぱなことをいつた。要するに、基本的には軍人の中から宇宙戦士を養成するのが主流だが、それ以外のなかからも少しは新しい血を入れたいと、よそそなものがいれば合格させようというものであるらしい。

試験の日は風のつよい日だった。

守は定刻の八時前に宇宙船氏訓練学校校庭にゆくと、すでに応募者一

千人ほどがあつまっていた。大方が陸海空軍人らしく、所属ことに忠^{たむ}していた

「採るのは五百人ぐらいだろう。従兄がそう言つていた」

と、仲間同士で話している。

(五百人も採るのなら、わしでも何とかなるかな)

もともと根が樂観的な守は少し安堵した。まあ、ダメなときはダメなときだと思い、おにぎりを食べていた。朝が早かつたので来る途中にコンビニで買つてきたものである。

試験がはじまつた。

学科試験は難なくこなし、体力テストも。軍事教練的なものに多少とまどつたが、自分としてはなんとかこなせたと思う。問題の小論文が始まつた。

正面に、題が貼りだされている。

「宇宙船の戦闘について論じよ」

というのが題であつた。

守は、なんのことかわからない。宇宙船同士の戦闘など聞いたこともない。(実際、当時は小規模な宇宙海賊の取り締まりくりしか戦闘もなか

宇宙船とは宇宙を飛行する兵器だから飛行機みたいなものであろう。

大型飛行機の空中戦のようなものではないかというイメージが、当時の軍隊内部での主流であった。

が、守は知らない。

(宇宙船というからには、船みたいなものであろう)

しかし、宇宙には上下左右がないはずだから、上下左右に動ける船、潜水艦をイメージしたら良いのではないか。そうだと想い、そう思つと急に勢いが出てきて書き始めた。

「自分は、かつて潜水艦で海底遺跡の発掘をしていたときがあります。

深海は光が届かずまるで宇宙を航行しているようでした」

というところから書きはじめ、ゴーストサブマリンとの戦闘の経験などもまじえながら、守さんなりの宇宙船同士の戦闘を描写した。

とにかく時間いっぱいで書き上げ、面接も難なくこなし皇帝に出てみると、他の受験生連中の話を聴くとはなしにきいていると

—— 宇宙船は潜水艦ではなく飛行機であるそうである。

(軍人以外は来るなということかな)

この出題から考えればそうであろう。ある種の軍事的教育をうけていないとわからない。あるいは出題者は、世の中に軍人以外の人種がいることを想像できないひとかも知れない。

ところが、十日ほどして、宇宙戦士訓練学校から通知があり守さんは合格した。

新入生説明会では合格者一人ひとりに適正面接があった。守の面接官

は神宮寺武士大尉で、その時宇宙戦士訓練学校の詳しい説明をうけた。

「練馬大学中退の古代守だな」

神宮寺はつづけてたずねた

「兵科は、なにを選ぶかね」

「なになにがあるのですか」

と、守さんはきいた。なにも知らなかつた。

「宇宙艦艇運用科、宇宙攻撃科、宇宙工兵科と、今年から新設された空間騎兵科だ」

「自分はなににむいていると思いますか」

守さんは逆にききかえした。

神宮寺は、守さんの経歴。宇宙船工学科中退という宇宙船設計を学んでいた経歴から地上降下作戦や、宇宙ステーションへの乗り込み用の宇宙船など考案してくれたらと思いつ

「空間騎兵科はどうだ」といった

「空間騎兵科とはなんですか」

「宇宙の陸軍部隊だ。もつとも兵隊ではなく、部隊を運用する宇宙船のノウハウの研究だがな」

つまり、宇宙船から上陸部隊などを支援したりする兵科ということだ。守さんは、宇宙探査で未知の惑星に進出する時に役立つと即座に判断し

「自分は空間騎兵にします」

と古代守がいったことが、地球の運命のある部分を決定づけたことになるである。

神宮寺は、宇宙船を潜水艦にたとえたユニークな論文を思い出し

「これは案外ひろいものかもしねんな」

とつぶやいた。

15

第四話 了

次回第五話 「七番長」